

ボランティア活動における地域貢献や子育て支援の意義  
-「わくわくランド」の実践報告-

角地佳子\*<sup>1</sup> 渡邊詩子\*<sup>2</sup>

**The Significance of Contribution to Community and  
Childcare Support in Volunteer Activities  
- Practical Report of “WAKUWAKU LAND” -**

Keiko Kakuchi\*<sup>1</sup> Utako Watanabe\*<sup>2</sup>

**Abstract**

The Department of Child Education and Welfare of Osaka International Junior College has conducted the Wakuwaku Land program, a program of childcare support activities, for parents and children in the neighborhood since 2017. -The program consists of a variety of content that incorporates the characteristics of the faculty of this department-, such as musical expression, artistic expression, physical expression, and childcare support. The Wakuwaku Land program aims not only to play a role in regional cooperation with the junior college but also to educate student volunteers in the significance of contributing to the community and childcare support. -In addition to these activities, through classes and practical training, we examine their changing perspective on contributing to the community and childcare support.

**キーワード**

ボランティア、地域連携、子育て支援

**I. はじめに**

大阪国際大学短期大学部幼児保育学科では2017年度から近隣の親子に向けた子育て支援活動として「わくわくランド」を開催している。その前段階として2013年度からの4年間は「親子ぞうけい教室」を行った。第1回目の「親子ぞうけい教室」は2014年2月2日に開催され、場所は大阪国際学園が大阪府M市のショッピング街に開設した地域交流セン

\*1 かくち けいこ：大阪国際大学短期大学部准教授（2022.7.7受理）

\*2 わたなべ うたこ：大阪国際大学短期大学部講師

ター「くすくす広場」であった。地域連携を目的にしたイベントを開催するには最適の場所であり、第1回目にもかかわらず、保護者31名、子ども44名、計75名の多くの参加者に恵まれた。幼児保育学科からは8名の学生がスタッフとして参加し、当時のアンケート結果からは、“子ども達の活動に触れ、とても良い経験になった”や“保護者との関わりが難しかったが、活動を通して自然と話すことが出来た”などの記録が残されている。幼稚園、保育所での実習は保護者との接点がないため、学生にとっては大変貴重な経験になったと考えられる。

その後「親子ぞうけい教室」は本学にて毎年開催され、2014年度は85名、2015年度は156名、2016年度は96名の参加者があり、4年間で計412名が参加したことからも、地域から高い関心が寄せられたといえる。

2017年以降は大阪国際大学短期大学部のキャンパス内に会場を移し、より多くのイベントを開催した。具体的には「親子ぞうけい教室」の絵画や工作などの造形活動を楽しんでもらうだけでなく、幼児保育学科の教員の特性を生かした音楽表現、身体表現、子育て支援など多岐にわたる活動を取り入れた。また「わくわくランド」の乳児版として2018年度には「びよびよランド」も2回開催している。この会場は幼児保育学科の専用棟(7号館)の乳児室であり、子ども用の机や椅子以外にも、子ども達が自由に寝そべることができるマットなどが設置されている。活動内容は、わらべ歌を歌いながら布を使う遊びや外部講師を招いたベビーマッサージなど、0歳から親子で参加できる貴重なイベントとなった。これらの活動については久保田、玉井、野口(2021)が国際研究論叢(Vol.34, No.3)<sup>1)</sup>で詳しく述べている。

2020年度はコロナ感染状況を鑑み「わくわくランド」が不開催となったが、2021年度は連携イベント<sup>2)</sup>を含む大学内での4回の開催と、地域での2回の開催となった。この地域開催は2017年度以来4年ぶりで、前回のM市の施設ではなくN市にある子育てセンター<sup>3)</sup>での開催であった。さらに前回とは異なり、大学の地域協働センターの協力により大阪国際大学短期大学部幼児保育学科が主催、N市が共催という名義で開催する運びとなった。これによりN市の子育て支援課の職員とも意見交換する機会を設けることができ、学生の実習先や就職先の相談が可能となった。

表1は2017年から2022年の5年間(2020年度は不開催)で28回に及ぶ「わくわくランド」のタイトルと参加人数を示したものである。実質的には4年間で1000人を超える参加者があり、幼児保育学科が大学における地域に向けた子育て支援活動に大きく貢献したといえるのではないだろうか。

また地域の参加者には含まれないが、大学内での「わくわくランド」は開催日が土曜日であったため、幼保連携型認定こども園大阪国際大和田幼稚園の預かりクラスからも毎回の参加者があり、子どもの参加人数はこの数値よりもさらに多く見込まれる。

表1 「わくわくランド」2017年から2022年までのイベントタイトル及び参加者数

日時	タイトル	開催場所	人数	大人	子ども	学生
2017.6.23	ポーズをとって楽しもう	大阪国際大学3号館	60	26	34	6
2017.7.22	おはなし大好き・スマホ育児をかんがえる	大阪国際大和田幼稚園	29	13	16	12
2017.8.5	木片や空き箱で作ろう	大阪国際大学4号館	61	25	36	14
2017.11.25	リトミックで遊ぼう	大阪国際大和田幼稚園	54	25	29	5
2017.12.2	手作りゲームで遊ぼう	大阪国際大学本館	28	13	15	0
2018.2.24	親子ふれあい元気アップ	大阪国際大学1号館	41	20	21	13
2018.4.14	わらべうたで遊ぼう(びびよランド)	大阪国際大学7号館	9	4	5	3
2018.8.4	木片を使ってつくろう	大阪国際大学4号館	54	22	32	12
2018.9.1	ベビーマッサージ(びびよランド)	大阪国際大学7号館	14	6	8	4
2018.9.22	親子で楽しくリズム遊び	大阪国際大和田幼稚園	37	18	19	不明
2018.10.27	親子で遊ぼう	大阪国際大学3号館	29	12	17	不明
2018.12.1	手作りゲームで遊ぼう	大阪国際大学本館	16	8	5	0
2018.12.22	クリスマス会コラボ	M市役所会議室	104	47	57	10
2019.2.2	劇発表を見に行こう	大阪国際大学本館	9	5	4	0
2019.2.27	音楽遊び	N市「RELATTO」	73	36	37	3
2019.3.2	身体を使って楽しもう	大阪国際大学1号館	9	4	5	不明
2019.8.4	木片を使ってつくろう	大阪国際大学4号館	88	37	51	10
2019.9.28	つくろう・はしろう・わらおう	大阪国際大学体育館	48	24	24	9
2019.12.7	手作りゲームで遊ぼう	大阪国際大学本館	27	12	15	0
2019.12.14	親子でふれあいコンサート	大阪国際大和田幼稚園	49	23	26	9
2020.2.1	劇発表を見に行こう	大阪国際大学本館	16	9	7	0
2021.7.10	つくろう・はしろう・わらおう	大阪国際大学体育館	33	19	14	10
2021.10.23	からだであそぼう	大阪国際大学体育館	11	5	6	5
2021.12.4	木片を使ってつくろう	N市「RELATTO」	12	8	4	4
2022.2.12	大阪国際大学短期大学の学生と一緒に楽しもう	N市「RELATTO」	25	14	11	4
2022.2.27	えいごであそぼう"Let's play with colors"	大阪国際大学4号館	22	12	10	3
2022.3.20	まと当てで遊ぼう	大阪国際大学4号館	28	17	11	5
2022.3.27	木片を使ってつくろう	大阪国際大学4号館	16	9	7	5

※合計1002名、保護者473名、子ども526名、学生146名

本研究では「わくわくランド」の実践に基づき、学生が主体的に地域貢献や子育て支援の意義を感じ取れるようになることを目的とする。また「わくわくランド」実施に向けての活動において、教員の働きかけや学生同士の学び合いの中で、学生自身の地域貢献や子育て支援の意識の変化について考察する。

## Ⅱ. 「わくわくランド」実施に至る背景

2017年に改訂された幼稚園教育要領の第1章、第6節 幼稚園運営上の留意事項、2 家庭や地域社会との連携において「幼児の生活は、家庭を基盤として地域社会を通じて次第に広がりをもつものであることに留意し、家庭との連携を十分に図るなど、幼稚園における生活が家庭や地域社会と連続性を保ちつつ展開されるようにするものとする」と記している。また同様に改訂された保育所保育指針の第2章、4 保育の実施に関して留意すべき事項、(3) 家庭及び地域社会との連携においても「子どもの生活の連続性を踏まえ、家庭及び地域社会と連携して保育が展開されるよう配慮すること」と記している。

幼稚園、認定こども園、保育所のどの保育機関においても家庭を基盤とした保護者との繋がりや地域社会に根ざした運営が不可欠となっている。いわば保育機関だけで子供の成長を支えるのではなく、子供を取り巻くすべての大人が成長を支える構造が必要である。

幼児保育学科では多分野にわたる専門知識を持つ教員が在籍しており、地域の子ども達とその保護者に保育に関わる遊びを提供することが可能である。

大学における地域連携に関して野澤(2016)は以下のように述べている。「今までの大学の地域連携は、大学が地域社会の要請に答えるという受動的な姿勢が多かった。しかし、これからは、大学は地域社会の主要構成者としてリーダーシップをとっていくことも必要になっていくであろう。」

まさに「わくわくランド」は大学発信であり、地域社会に対して子育て支援の在り方を能動的に訴えているといっても過言ではない。子育て支援といえば地域の自治体が運営する子育て支援施設の役割という認識があるが、今後は保育者養成校としての大学も、その一端を担う必要がある。

また木村(2014)は「近年、学内保育所を整備している大学も多く、幼稚園教諭及び保育士養成大学や子ども関連学科のある大学においては、子育て支援ルームを保有し、地域貢献・社会貢献に寄与している。大学で実施されている子育て支援についての報告も年々増加傾向にあり、各大学が様々な形態や目的をもって展開している。」と記している。

幼児保育学科も専用棟を持ち、乳児室も完備している。併設園だけでなく地域の親子に向けた子育て支援を展開していたが、コロナ禍では役目を果たし切れていないことが残念である。

このような背景から幼児保育学科では主に音楽表現、造形表現、身体表現を担当する教員が、学生と協力して地域の子ども達に専門分野に関わる遊びの場を提供するイベントを立ち上げた。さらにボランティアを担う学生が教員と協力して地域連携のイベントを担うことで、実習では経験できない地域連携や子育て支援の学びを体得することが可能となる。

幼児保育学科の学生は2年間で幼稚園教育実習4週間、保育所実習4週間、施設実習10日間の履修が必須となっている。この実習では子ども達と触れ合い、幼稚園教諭や保育士、施設職員の仕事を学ぶ現場での貴重な体験となる。しかし実習ではピアノ、手遊び、絵本の読み聞かせなど保育の中で子どもと活動する技術面の習得や、年齢に応じた子どもの接し方などを重点的に学び、保護者との接点はほとんどない。もちろん子育て支援がどのようなかを理解する機会もない。子育て支援の知識や経験のない学生は就職後の保育現場での実践を通して学ぶことになるが、在学中に少しでも体験出来れば現場での戸惑いも少ないのではないだろうか。

学生は地域連携のイベントに参加することで、子育て支援の知識や経験を積み、園では見られない子ども達の普段の姿や、保護者から子どもへの寄り添いも身近に感じることができる。実際に地域連携のボランティア活動に参加した学生は、母親が3人の子ども達とイベントをこなす姿を見て、子育ての大変さを実感した。まだ歩けない赤ちゃんを抱っこしたまま、年長の子ども達の遊びに加わる母親の助けができないかを自分で模索し、自らの2人の子ども達に話しかけた。結果的に母親は提供された椅子に座って、離れた場所から学生と遊ぶ上の子ども達をゆっくりと見守ることができた。これは子育ての大変さを肌で感じた学生の行動により実現したことである。

こうした実践での子どもと保護者への関りは、保育者としての保護者支援を理解することにつながり、ひいては幼稚園第3章及び保育所保育指針第4章の「子育て支援」における「保護者との相互理解」や「保護者の状況に配慮した個別の支援」の体得が可能となる。

このように大学における地域連携の役割と実習では経験できない子育て支援の学びを学生に保障することが「わくわくランド」の立ち上げの土台となっている。

### Ⅲ. 調査方法

#### 1. 調査概要

幼児保育学科では2022年2月12日の「わくわくランド」(N市子育て支援センターで開催)に向けて、事前にボランティア学生を集めてパネルシアター<sup>4)</sup>やゲームの練習を行った。ボランティア学生の募集に関しては2つのセミナーを合体させ、初対面の学生もいる中で無作為に4グループ(4人、5人、5人、5人)を構成した。そのため練習に至る円滑なグループ活動が開始されるまでに若干の時間がかかった。

パネルシアターは教員の準備した「ももたろう」「赤ずきんちゃん」「ブレーメンの音楽隊」「金のガチャウ」の4題材をグループごとに1つを選択して、約1ヶ月間の練習に取り組んだ。このテーマに関しては幼児保育学科が保管するパネルシアターの中から初心者向けであり、登場人物の数が多いものを教員が絞り込んだ。学生は登場人物以外の背景や小道具を制作した。この作業はPペーパー(不織布)で形を切り抜き、カラーサインペンで色を塗るだけであるが、どのような背景にするか、登場人物に何を持たせるかなどグループでの話し合いが不可欠となる。また実際に練習が始まると、声の出し方やセリフの間の取り方、どのような音楽をどこで入れるかなどを話し合い、パネルシアターの完成度を上

げる工夫が必要である。練習後にはお互いに感想を述べ、他人の演技に対しても評価をしないといけない。つまり個人の自主性や協調性、他人に対する寛容性や柔軟性が試される。

そこで練習の開始日（2022.1.14）と最終日（2022.2.9）にアンケートを実施し、「主体的に取り組む姿勢」「異なった考え方を受け入れる柔軟性」「社会貢献に向けた意欲」などについての調査をした。アンケートの文章は学生が理解しやすい内容に変更した。さらに自由記述による感想欄を設けた。

## 2. 調査対象

「わくわくランド」に向けて活動したボランティア学生（2つのセミナー生）19名を対象とした。ただし1回目の調査では1名が欠席のため18名が調査対象となる。

## 3. 倫理的配慮

調査については任意であり、成績と一切関係がないこと、途中で回答をやめることができ、結果は統計的に処理され、個人が特定されないことをあらかじめ説明し同意を得て実施した。

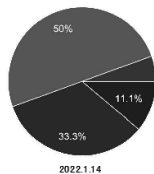
## 4. 調査結果

「主体的に取り組む姿勢」「異なった考え方を受け入れる柔軟性」「社会貢献に向けた意欲」以外にも「子どもとの関わりにおける積極性」「造形表現の科目の得手不得手」などの8項目を調査した。しかし本研究では「主体的に取り組む姿勢」「異なった考え方を受け入れる柔軟性」「社会貢献に向けた意欲」の3項目に注目して考察した。

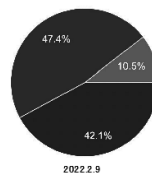
### 「主体的に取り組む姿勢」

#### 1. イベントなどの活動で、自分で考えて行動することができると思う

18件の回答



19件の回答



- とても思う
- やや思う
- あまり感わない
- まったく思わない

- とても思う
- やや思う
- あまり感わない
- まったく思わない

図1. 主体的に取り組む姿勢に関する回答の内訳

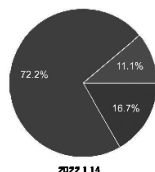
### 自由記述から

ゼミが違くと接する機会がないので初めましての状態では最初は気まずかったです。でもひとつの物を一緒に作り上げる楽しさを知り、導入はこうしようとか自分の意見を出し合うようにまで言えるようになりとても良い機会でした。

### 「異なった考え方を受け入れる柔軟性」

4. 友達と関わる中で互いの想いや考えを受け入れ、イベントなどをやり遂げられると思う

18件の回答



19件の回答

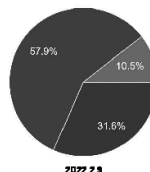


図2. 異なった考え方を受け入れる柔軟性に関する回答の内訳

自由記述から

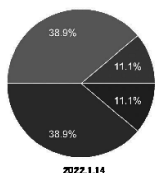
初めましての人達で緊張しましたが、仲良く話すことができ意見もたくさん出し合あうことができたことが良かったなと思います。人形を動かしながらセリフを言うことや、導入を考えることが難しかったです。

学校は同じだけけど今まで顔も声も見たり聞いたことない人達とコミュニケーションが取れて良い経験になりました。

### 「社会貢献に向けた意欲」

8. 地域で子どもと関わるイベントがあれば積極的に関わりたいと思う

18件の回答



18件の回答

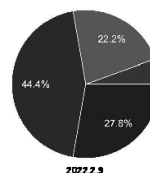


図3. 社会貢献に向けた意欲に関する回答の内訳

自由記述から

はじめてのボランティア活動で嫌やなって思ってたけど子供たちがちゃんと聞いてくれたのでよかったなと思いました。楽しんでたのでよかったです。声が小さかったのはもうちょっと声出して感情ももっとこめてたらよかったのかなと思います。(イベント終了後)

しんどかったですが子どもも可愛かったです。保育について強く学びたいと感じました。(イベント終了後)



## 5. 考察

「主体的に取り組む姿勢」は「イベントなどの活動で、自分で考えて行動することができる」に文章を変更した。「とても思う」は練習開始日に11.1%だったが、最終日には42.1%になっている。さらに「やや思う」も33.3%から47.4%に増加している。

これは自由記述にもあるように、少人数であるため黙っては何も進まず、自分が積極的に取り組まないとパネルシアターが完成しないと判断したからではないか。また自分の意見を他人が受け入れてくれることで、自分の考えに自信を持つことができるようになり、より「主体的に取り組む姿勢」が生まれたと推測される。

「異なった考え方を受け入れる柔軟性」は「友達と関わる中で互いの想いや考えを受け入れ、イベントなどをやり遂げられると思う」に文章を変更した。「とても思う」は練習開始日に16.7%だったが、最終日には31.6%になっている。「やや思う」は72.2%から57.9%に減少しているが「とても思う」と「やや思う」の合計は練習開始日の88.9%から最終日の89.5%に増加している。ここで注目すべきは「とても思う」が2倍近くになっていることである。パネルシアターの制作や練習を通じて、初対面の学生と意見を交換し、お互いに同じ目的に向かって協力し合えたことで他人に対する寛容な心が育ったと考えられる。それと同時に「異なった考え方を受け入れる柔軟性」を持つことで、自分自身も他人に受け入れられていると感じたのかもしれない。

「社会貢献に向けた意欲」は「地域で子どもと関わるイベントがあれば積極的に関わりたいと思う」に文章を変更した。「とても思う」は練習開始日に11.1%だったが、最終日には27.8%になっている。さらに「やや思う」も38.9%から44.4%に増加している。ここでは社会貢献の意識よりも自分達の練習の成果を誰かに見て欲しいという気持ちが高いのかもしれないが、実際に子ども達の喜ぶ顔を見ると、大きな満足を得られることは十分に予測できる。積極的に関わりたいと思う気持ちが社会貢献の第一歩となる。

## IV. 総合考察

残念ながらN市の子育て支援センターで開催された「わくわくランド」はコロナ感染状況を鑑み、実施に向けて練習を重ねた4グループのうち1グループのみの参加となった。しかし、アンケートの調査結果にも反映されたように練習の過程で学生達は「主体的に取り組む姿勢」「異なった考え方を受け入れる柔軟性」「社会貢献に向けた意欲」が向上した。結果として本研究の目的である、学生が主体的に地域貢献や子育て支援の意義を感じ取れるようになることは達成できたと考えられる。

また実際に「わくわくランド」に参加したグループの学生の感想に“やってみて、色々な子どもがいることがわかり勉強になった。”“ボランティアは毎回いい体験しています。ありがとうございます。”など地域貢献や子育て支援への理解を示す内容が記されていた。「わくわくランド」実施に向けた練習や当日に参加した親子の様子を目の当たりにしたからこそ、地域貢献や子育て支援に無関心であった学生達の意識が変化し、保育者として自覚も芽生えたのではないだろうか。



参加された保護者のアンケートには「学生の皆さんが子ども達に優しく話しかけてくださり、嬉しく思います。」「次回のイベントが楽しみです。」「休園で家庭保育をしていたので子ども達も気分転換ができました。」など学生に好意的な回答が多かったが、その一方で「もう少し声が大きいと後ろの子ども達まで聞こえたのに残念です。」などのパネルシアターの練習不足を指摘されるご意見もいただいた。学生達は保護者アンケートの回答を真摯に受け止め、子ども達に喜んでもらえるよう次回はもっと練習に励みたいと前向きな姿勢を示した。

これらのことから「わくわくランド」は大学における地域連携だけでなく、ボランティアに参加した学生が、地域貢献や子育て支援の意識を高める実践の場としての役割を担っている。また学生同士の学びやパネルシアターなどの保育技術の向上を含む、教育的効果も期待できる。

## V. 今後の課題

「わくわくランド」は地域の親子が参加するため、さらに多くの学生のボランティア参加を促し、地域貢献や子育て支援の意義を学んで欲しいが、実施に当たってはコロナ感染状況に左右される。そのため計画的に開催することが難しく、予定を立てても実施不可となる場合がある。コロナ感染の終息が見込まれない中でも、定期的に「わくわくランド」を開催することが、本当の意味での持続可能な地域貢献や子育て支援になるのではないだろうか。

そこで今後も継続して「わくわくランド」を実施するにあたり、Zoomなどのアプリを使用したオンラインによる開催も視野に入れる必要がある。幼児保育学科の学生はオンライン授業を経験したことから画面共有やチャットなどの技術を使いこなすことは簡単である。これらの大学での学びを生かし、教員と協力してコロナ禍での「わくわくランド」を定期的に開催することを目指したい。

### 謝辞

本論文の標題、概要の英語表記に携わっていただきました山村恭子氏に心から御礼申し上げます。

### 付記

本研究は2021年度大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部特別研究費「学生の地域活動が授業にどのような効果をもたらすのか」(課題番号9)の助成金を受けた研究成果の一部である。

### 注

- 1) 久保田健一郎、玉井久実代、野口知英代 保育者の専門性としての子育て支援に関する研究-大学における子育て支援活動「わくわくランド」に関連して-

- 2) 大阪国際大学短期大学部・幼児保育学科、滝井高校、大阪国際大和田幼稚園が連携して行うイベントであり、高大連携授業の一環でもある。
- 3) N市が運営する未就学児とその保護者、妊娠中の方を対象とした子育て総合支援拠点であり、室内には遊具やキッチン付のセミナールームがある。
- 4) パネル布（毛ばだちの良い布）を貼ったボードを舞台に、Pペーパーという不織布で作った絵人形を貼ったり外したり、裏返したり、舞台のあちらこちらへ動かしながら演じる、児童文化である。  
カラーパネルシアター・アイ企画、パネルシアター  
([http://www.ai-panel.com/about/panel\\_theater.html](http://www.ai-panel.com/about/panel_theater.html))、2022.7 閲覧

#### 引用文献

- 厚生労働省、保育所保育指針、フレーベル館、2018。  
文部科学省、幼稚園教育要領、フレーベル館、2018。  
木村直子、大学における地域子育て支援活動の役割と意義－大学内の子育て支援活動を展開する教育プログラムの実践から－、日本福祉のまちづくり学会、福祉のまちづくり研究第16巻第Ⅲ号、2014、21-32頁。  
野澤一博、大学の地域連携の活動領域と課題、産学連携学 Vol.13, No1、2016、1-8頁。